

## 須津千人塚古墳の概要

### 須津古墳群のなかの千人塚古墳

千人塚古墳は、飛鳥時代（7世紀中頃）に駿河湾の奥部にそびえる愛鷹山南麓に築かれた、横穴式石室を有する古墳です。千人塚古墳のすぐ西側を流れる須津川の一帯には、総数200基を数える須津古墳群が展開しており、当古墳は特に東岸の支群の中核をなすものであるとの理由から、まず昭和51年（1976）に地表に残る墳丘と石室部分を富士市の史跡に指定しました。その後の発掘調査を経て、令和6年（2024）6月には地表下に残る周溝部分のほか、近接して築かれた3基の横穴式石室墳を加えた範囲を追加指定し、現在は本年11月1日の公開開始に向け、富士市による保存整備工事を進めています。

### 飛鳥時代のスルガを代表する横穴式石室と副葬品

指定後の発掘調査により、千人塚古墳は幅約3mの周溝を有する直径約21mの円墳と判明しました。また、埋葬施設は静岡県東部では最大級となる全長11.5m、中央部幅2.05m、石室高2.35mの無袖形横穴式石室であり、石室内には礫敷きによる床面上に組合式箱形石棺3基と屍床1基を設置することで、最低4回の埋葬がおこなわれたとみられます。

石室内の調査では、金銅製飾金具、丸玉、大刀、金銅製刀装具、鉄鏃、弓金具、砥石、鎌、刀子、馬具、銅甕、土器などの遺物が出土しています。3組の馬具のうち、1組は帯金具等に飛鳥

時代の仏像装飾と関係のある意匠が毛彫文<sup>けぼりもん</sup>によって施された大変希少なものです。また2024年の調査では、流麗な唐草文で彩られた装身具の一部とみられる飾金具も出土しており、これらは被葬者と倭王権との深い関係性を示す資料といえます。

### 死後も主を支える小円墳群

千人塚古墳の背後に立地する径10m前後の小円墳は、いずれも7世紀前半から後半にかけて築造されたものです。これらの古墳には、その立地や石室規模、副葬品の内容などから、千人塚古墳の首長の下で地域経営を支えた、ほぼ同世代の集団が眠っていると考えられます。現在も残る古墳群の景観によって、生前の社会関係が表現されているとみてよいでしょう。

### 文化財保存活用区域の拠点史跡として

富士市の須津地区は、文化財保存活用地域計画において、多様な文化財が集中する文化的空間の創出を目指す地区（文化財保存活用区域）に認定しています。須津古墳群では、市と（一社）須津地区まちづくり協議会との共催により、継続的に文化財関連イベントを実施していますが、千人塚古墳の公開後はさらに利活用を図っていく予定ですので、今後の展開にもご期待ください。



▲千人塚古墳の横穴式石室内部



▲2024年の調査で出土した金銅製唐草文飾金具



▲千人塚古墳を中心とする古墳群の群集イメージ



## 千人塚古墳の工事状況



千人塚古墳 墳丘植栽工（南東から）



千人塚古墳 石室床面敷石再現（南から）



須津J- 第12号墳 再現展示（南西から）



千人塚古墳 南側石垣と駐車場（南から）



墳丘盛土と敷地舗装状況（南西から）



千人塚古墳 復元ジオラマ（東から）

## 整備工事体験ワークショップのようす（6/28・7/12）



須津川での石材採取（北東から）



千人塚古墳石室床面への敷設（北から）